優秀賞

奇跡の命

出井　玲子

柳田先生こんにちは

私は、絵本「エリカ～奇跡のいのち～」が愛読書になりました。

第二次世界大戦下、一筋の「生」の光を求めてナチス・ドイツの強制収容所に向かう車窓からお母さんが赤ちゃんを大空に向かって投げるという衝撃的な内容は、それはそれは印象に残る作品でした。緊迫する状況にあって決意を固め行動した両親の姿を主人公エリカの想像という形式を取りながら語られる場面を、息つく間もなく一気に読み進めました。柳田先生の翻訳に、エリカの命を必死で守ろうとする母の思いがふんだんに込められていて、一層心揺さぶられました。

私がこの絵本を手にしたのは、当時中学校教員として生徒に戦争を伝え考えさせるために資料や本を探していたときのことでした。しかし、この物語は、戦争の事実と悲惨さを伝えること以上に、命の大切さと神秘、両親の計り知れない愛とそれを支える人々の力を伝えるものでした。

授業で生徒たちが受けた衝撃は殊の外大きく、「戦争の恐ろしさを改めて知った」「こんな辛い思いを誰もしてはならない」と感想を述べる者も多くいました。中には、「社会で勉強するより歴史が理解できた」などと話す者もいました。さらに、話は「母が自分は「死」に向かう中で、私を「生」に向かって投げた」という一文に込められた思いと生きることの意味を考えることに進みました。

「信じられない行動だけど、母はその位なんとしても子供の命を守りたかったのだと思う」

「エリカは自分の中に母が生きていると感じたのだと思う」などの意見の中、私が特に印象に残ったのは、「自分だけのものではない自分の命の重みを感じる」「自分の存在は奇跡だと思った」というものでした。命について真剣に考える時間がもてました。いつの間にか成長した生徒を頼もしく感じる時間でもありました。

さらに、絵本の絵の力に驚く生徒の声もありました。走り去る列車の後ろ姿とホームに残されたベビーカー。ラストシーンのエリカが見つめる未来に向かって走る列車と、強制収容所に向かう列車との対比など、絵には、文章以上に訴えるものがあります。中でも、モノクロに近い一枚の挿絵の中で、大空を舞う唯一桃色に彩られた赤ちゃんには、生徒の感想に「一筋の光を示す希望の桃色は一度見たら忘れられません。」とありました。

授業を行った生徒が卒業を前にした三月始め、一本の映画を鑑賞しました。「ライフイズ・ビューティフル」というイタリア映画です。主演はロベルト・ベニーニというコメディアンで、第二次世界大戦下のユダヤ人の迫害を、ユダヤ系イタリア人の親子が笑いと涙で綴る映画です。最期の別れのシーンで、息子が悲しまないよう、コミカルに演じる父親の姿には涙が止まりませんでした。絵本と映画を合わせて鑑賞することで、より深く心に残れば良いと思うのですが、先生、こんな学習の提案はいかがでしょうか。

絵本には、夢と希望があります。大切なことを

頭ではなく心に刻み込む大きな力があります。絵本は子供だけのものではないと思います。若者が生きることに悩み苦しみ迷う姿が顕著な昨今、今こそ、「大人こそ絵本を」子供も学生も大人も一緒に読み、考え語り合う必要があると実感します。

時に自分を受け入れられず、迷いをもつ生徒達も、絵本の世界に飛び込むと大切な何かを探し始めるのだと思います。それはまるで宝探しのように。

柳田先生、最後までお読み頂きまして、ありがとうございました。

授業の終末は、こう閉じました。「エリカは、あなたであり私でもあります。奇跡の命をどう生き、どう引き継ぐかがあなたと私のこれからの課題です。」

～柳田邦男先生からのメッセージ～

中学生になってから絵本を読むと、幼かった頃とは違って、かなり深い読み取り方をするということについては、子どもの部の優秀賞に選んだ川上朋花さんへのメッセージの中で詳しく書きました。

出井さんは、以前中学校の教師たっだときの、絵本を使った授業のことを書いてくださった。取り上げた絵本は、私が翻訳した『エリカ　奇跡のいのち』でした。ねらいは、生徒たちに、戦争の現実を考えさせるためだったとのこと。

この絵本は、第二次世界単線中に、ナチスドイ

ツが人種差別の思想によってユダヤ人を絶滅させるために大量に強制収容所に送り込んでいたときに起きたエピソードを題材にしたものです。

エピソードとは、強制収容所に向かう貨物列車にすし詰めに乗せられた若い母親が赤ちゃんのいのちだけは救いたいと、あかちゃんを貨車の小さな窓から外に投げ捨てたところ、外でたまたま目撃した農家の人が赤ちゃんを拾って密かに育てたという話です。その赤ちゃんが成長してから、自分の奇跡的に救われたいのちと人生について語るというかたちで絵本が作られたのです。

中学生たちは、戦争の恐ろしさを理解しただけではなかった。母親が自分は生きられなくても、この子のいのちだけは救いたいという思いから、赤ちゃんを外に投げ捨てるという決断と行為をめぐって、深く考えるところまで進んだのですね。生徒が語った言葉がいろいろと紹介されていますが、私が凄いなと感じたのは、出井さんも最後に「特に印象に残った」ものとして紹介している次の二つの言葉です。

「自分だけのものではない自分の命の重みを感じる」

「自分の存在は奇跡だと思った」

この平和な時代に、戦争を知らない世代の子どもたちに、戦争の悲惨さやいのちのかけがえのなさについて、どう教えるかという課題は、教師た

ちにも戦争体験がないだけに難しい。そういうなかで、教材として絵本を使った出井さんの取り組みと授業展開はすばらしいと感じました。